

「類人猿の形態と進化」

國松 豊

(形態進化分野・進化系統分科)

類人猿は、「人に似た猿」という意味の名称が示すように、約 200 種の現生霊長類の中で最もわれわれ人類に近い動物である。現生人類が人口 60 億に達し、全世界に分布しているのに対して、類人猿は数少なく、アフリカにゴリラとチンパンジー / ボノボ、東南アジアにオランウータンとテナガザルが棲息するのみで、絶滅も危惧されるグループである。系統的にはテナガザルがヒトから最も遠く、およそ 2000 万年前ごろに他と分かれたのではないかと推測されている。ついで、オランウータン、ゴリラの順に分岐が起こり、最終的におそらく中新世後期の後半にヒトとチンパンジー / ボノボの系統が分かれた。この最後の分岐の年代は、まだ流動的であるが、現状では一応 700 万 ~ 800 万年前ごろとしておくのが妥当かと思われる。分類学では、ヒトと類人猿をまとめてヒト上科と呼んでいる。

現生類人猿はゴリラのようにオスだったら体重 200 キロ近くに及ぶ大型のものから、テナガザルのように体重数キロにしかない小型のものまで、大きさには随分と差がある。また、アジアに棲むオランウータンとテナガザルは非常に樹上性が強いが、アフリカのゴリラやチンパンジー / ボノボはわりと地上も多く利用し、地面を歩くためにナックルウォーキングと呼ばれる独特の歩き方を身に付けている。われわれヒトに至っては完全に地上性に移行し、直立二足歩行という、他の動物から見たらえらく奇妙な歩き方を日常におこなっている。このように、ヒト上科のなかにも結構な違いがあるのだが、共通して見られるからだの特徴は、ひとこと言えば樹上でのぶらさがり型の運動に適応しているということである。

ぶらさがり運動への適応として、たとえばヒト上科では、胴体が左右に広く、背腹方向に浅くなっており、それにともなうて肩甲骨も胴体の側面から背中側に移動している。肩関節の可動性は高く、前後・左右・上下、いろいろな方向へ自由に動かすことができる。また、肘関節の肘頭という部分は腕を伸ばす筋肉の付着部で、ふつうの四足で歩く動物では、テコの原理で筋肉の力を有効に使うために肘頭ははっきりした突起になっているのだが、ヒト上科では腕を完全に伸ばすためにこの突起はほとんど目立たないくらい縮小している。この他にもぶらさがり型運動に関連すると考えられる特徴はいろいろある。地上性の動物となったわれわれヒトでさえ、その遺産を継承しているくらいである。

一方、化石の記録を見ると、アフリカからヨーロッパ、アジアまで、そこそこ類人猿の化石は見ついているのだが、実は現生の類人猿に直接つながるようなものの化石というのは、いまのところほとんどない。インドとパキスタンで見ついている *Sivapithecus* のように、モザイク的に現生類人猿(この場合はオランウータン)に似た特徴を示すものもあるが、ではそれが確実にオランウータンの祖先だと断言できるかという点、矛盾する証拠もあって、いwijk言いがたしなのである。特に、2500 万年前から 1500 万年前ごろといった古い時代のアフリカの化石類人猿は、現在の類人猿とは随分と違っている。いろいろな種類がいたなかでも解剖学的な特徴がよくわかっていて代表的なものは *Proconsul* であるが、これは現生のヒトよりも大きい動物で、からだの骨の特徴から、いまの類人猿とことなり、樹上性四足歩行を基本としていたと考えられている。このような原始的な類人猿から、どのように現在のヒト上科が進化してきたのかは、実はまだよく解明されておらず、今後の研究の進展に待つところが大きいのである。

参考図書

- ・國松豊(2002)ヒト科の出現 中新世におけるヒト上科の展開 . 地学雑誌 第111 巻6号:798-815.
- ・國松豊(2002)東部ユーラシア新第三紀の化石類人猿. 霊長類研究 第18 巻2号:97-129.
- ・國松豊(2003)テナガザルの進化はどこまでわかっているか? 霊長類研究 第19 巻1号:65-85.
- ・D. R. ピガン(2003)地球が「猿の惑星」だったころ. 日経サイエンス 2003 年 11 月号